

## 今週のメニュー

## ■トピックス

◇千葉県八千代市と東京都杉並区で出前授業

## ■随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(18)

木下 清隆

## ■編集後記

## ■トピックス

## ◇千葉県八千代市と東京都杉並区で出前授業

千葉県八千代市の小学校の先生方から「プラスチックのリサイクルについて」というテーマで研修会を行ってほしいとの要望をいただき、(一社)プラスチック循環利用協会と共同で出前授業の内容紹介と各種リサイクル関連の実験を行いました。

八千代市の小学校の先生方は、定期的にいろいろなテーマで研修会を実施されているとのことで、今回は八千代市教育委員会の紹介で、当協会の出前授業の活動を知ることになり依頼していただいたとのことでした。研修会は、7月6日に八千代市小学校の21名の先生方に参加いただき、萱田小学校の理科室にて行われました。

研修内容は、前半に当協会から「プラスチックとは」というタイトルで、高分子とプラスチックの説明、プラスチックの原料は何か、汎用プラスチックの特性、日本で生まれた特色あるプラスチックなどを紹介し、同時にプラスチックの比重の違いによる分別実験を行いました。プラ循環協からは、中盤に3R (Reduce、Reuse、Recycle) カードの紹介と使い方の説明をし、後半にポリスチレンの溶解・分離・再発泡の実験、PETボトルからの熔融紡糸実験、スチレンカップからのキーホルダー作成実験と、トータルで2時間の枠をフルに使ってのものとなりました。



八千代市研修会の様子

研修会では、通常の生徒向けの出前授業ではなく、将来先生方が独自に授業を行えるように、「生徒に対してこんなことを教えています。」、あるいは「こんな教え方をしています。」というアピールポイントを説明しながらの授業を行い、実験においては、実験・操作するときのコツなどの説明も加えながら行いました。



ポリスチレンの減容実験

比重の実験では、実際にリサイクルの現場では水に沈むPETと浮くキャップが分離回収されていることを説明し、さらにPETから糸(ポリエステル繊維)を作る実験を示したことで製品化までの道筋が分かり、先生方には好評でした。参加いただいた先生は若い方が多く、ポリスチレンがリモネンに溶解する様子や、PETがアルコールランプで熱せられ糸になる様子をスマホの動画で撮影したり、自分で作ったスチレンのキーホルダーをスマホで写真撮影したりと、スマホを活用している先生が多くいました。

7月16日には、杉並区紅葉中学校の1年生（3クラス）向けに出前授業を行いました。同中学校への出前授業は今回で3回目です。過去に「理数フロンティア校」に指定されていた経緯もあり、土曜授業では、企業・大学からの授業や、JAXAの講演会も実施したことがあるそうです。当協会は、「プラスチックのお話し」というテーマで、プラスチックの比重による分別実験も織り交ぜ授業を行いました。最後のクラスでは、途中で生徒がリサイクルについての質問をしてくるなど、プラスチックリサイクルへの興味が強いことを感じました。



出前授業定番サンプル

杉並区は、一人当たりのごみの排出量が東京23区の中で最も少ない区です。「ごみ・資源の分け方・出し方」についても教育が行き届いており、それにより子供たちの関心も高いものと思われます。今回の当協会の出前授業で、子供たちはプラスチックの資源回収の重要性や環境とのかかわりについて理解を深めていただけたものと思います。

八千代市でも杉並区でも、先生方は環境教育に力を入れていることをお話しされていました。当協会の出前授業は、ごみ・リサイクル・環境・持続可能性の問題などをプラスチックの理解を通して、今後ともわかりやすく説明してゆきたいと考えております。

## ■ 随想

### ◇古代ヤマトの遠景〔番外〕（18）

木下 清隆

<前回とのつながり>

前回から、櫛玉命と天日別命との関係を『伊勢国風土記』の中に探しているが、伊勢津彦命を追い出した、天日別命は、どうも風土記の中で創作された人物らしいことが明確となってきた。今回もその続きである。

4) 天日別命がこの国を平定したことで、この国は伊勢津彦の名に因んで、伊勢と名付けられ、天日別命はここを封地として、更に大和の耳梨を宅地として賜った。

— 伊勢の国の由来が伊勢津彦に依るとする風土記の記述は、これまでの検討のように伊勢津彦の存在の大きさを考えれば当然のことといえる。ただ、ここで注意が必要なのは、伊勢津彦なる名称の人物がいて、伊勢の名が生まれたのか、伊勢の豪族の名を後から伊勢の地に因んで伊勢津彦なる名を与えたのか、の問題である。歴史的に著名な多くの豪族のほとんどが彼らの本拠地となった地名を、その氏の名としていることから、この場合も地名が優先していたと考えられる。従って、風土記の伊勢の地名由来譚は風土記に多い「地名こじ付け譚」の一つに過ぎないといえよう。

このように考えると、伊勢の地に入ってきて次第に勢力を伸ばしていった豪族が、自らを「伊勢の某」と名乗るようになり、いつしか「伊勢氏」と呼ばれるようになったことが想定される。その彼らが、彼らの祖を伊勢津彦と名付け、祖霊として何処かで祀るようになったものと考えられる。先に述べたように伊勢津彦が天日別命に取って代わられたとするなら、これは、意識上の名称変更に過ぎないことから、実体としては、

伊勢津彦＝天日別命

を意味することになる。天日別命が度会氏の祖となったのは説明のように後世のことになるが、伊勢津彦も彼らの祖であったのか否かについては未だ確かめられていない。もし、伊勢津彦も度会氏の祖であったとするなら、伊勢国造家と度会氏は同族であったことになる。

次にこの4)の内容の中で注目されるのは、天日別命が大和の耳梨を宅地として賜ったことである。伊勢を平定したから、伊勢の地を封地として賜ったとするところまでは、当然のこととして理解されるが、宅地の件は理解に苦しむところである。伊勢に今後住み着くようになる天日別命にとって大和の地は不要であり、このように一見矛盾するようなことを、何故風土記に残したのかは疑問である。考えられることは、伊勢国風土記を撰述した伊勢国造家としては、どうしても残しておきたい歴史的な伝承だったからではなかろうか。なお、各地の風土記は新しい国司が編纂したとされているが、伊勢の場合はここに検討しているように、極めて伊勢国造家擁護の色彩が強く、出雲と同様に伊勢の場合も、地元勢力の国造家が中心となって記述したものと考えられる。

伊勢国造家が残したかった伝承とは、彼らの祖が神武東征に参加したこと、大和入りした後、耳梨に宅地を与えられたこと、その後、伊勢に入り、伊勢の一大勢力となったこと等である。その彼らは伊勢津彦を祖としてこれまで伊勢地方を治めてきた。しかし、何かの理由でその祖を天日別命に替えざるを得なくなった。このように彼らの歴史の流れを想定してみると、耳梨は重要な意味を持つてくる。これが的外れな地名であればこのような想定が全て崩れることになるからである。

先ず耳梨の地名であるが、これは大和の<sup>みみなし</sup>耳成山で知と考えられる。耳成を耳梨とも書き表すことが知られているからである。そうであれば大和三山の一つとして良く知られる耳成山の近くに、天日別命は神武天皇から宅地を賜ったことになる。この場所は決して奇異な場所ではない。それは、このような宅地を賜る話が日本書紀の神武東征譚の最後に出てくるが、来目氏と大伴氏が畝傍山の近くに宅地を

**大和三山**：藤原京を中央に三つの山が互いに約3キロ離れて三角形に位置している。



畝傍山（西）



耳成山（北）



藤原宮址

天香具山（東）



賜っているからである。耳成山と畝傍山はすぐ近くである。距離にして三 km 程度しか離れていない。従って、風土記に書かれている耳梨の地を宅地として賜ったというのは、決して奇異な内容ではなく、現実的にはありうる話である。しかし、天日別命即ち、伊勢津彦は神武東征には登場してこないことから、この宅地下賜の記載も当然無いが、これは単なる記載漏れと考えることは出来る。このように耳梨が決定的外れな地名ではないことから、現実的には伊勢国造の遠祖が神武天皇に供奉して大和に入り、耳成に宅地を与えられ、その後、その孫が伊勢の地に向った、或いは時の大王の意向で伊勢に入った、といった想定は、かなり可能性のある話となってくる。  
(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)  
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

## ■ 編集後記

梅雨が明けてきましたが、今年は空梅雨で水不足が心配ですね。梅雨どきと言えばあじさいがきれいですが、終わりの時期が近づいているようです。青やピンクに彩られていた花（正確にはガクですが…）がだんだんと色褪せて薄い緑や茶色掛かってきて、ちょっとみずぼらしい感じになりますよね…。

ところが、そういう時期のあじさいを「アンティーク」と呼ぶのだそうです。そう言われれば、シックで趣きのある風情で素敵に見えてきます…。「秋色あじさい」とも言われ、摘み取らずに残して楽しむ方もいたり、その後ドライフラワーにしてクリスマスリースに加えたりと、あじさいの見頃は梅雨どきだけではないようです。(漠)



## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 名原 克典

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)